

① 金子安次さんへ

手紙を書いてからちょうど5年が経ちました。

5年前は学生で授業もあったので毎週戦争について考える時間がありましたが、今では半年か一年に一回程度かもしれません。75年前の戦争と自分の生活を結びつけることが難しくなっています。

戦争の書籍やドキュメンタリー映像を観ていても、ふと視線を上げれば、いつまでも続くように思える日常があり、そちらばかりに気を取られています。

金子さんは、死にたいという若者が現れた時、死にたいという気持ちは分からなくはないけど、たくさんの人々の死を見てきたから、生きるというのは尊いことだと、おっしゃっていますね。（※P215の「撮影を終えて」の落合さんの文章からです）

金子さんは「生きるの尊さ」をどのように伝えようとしていたのでしょうか。生きることや命の尊さを感じることはとても難しいです。僕自身、命の尊さの感覚を掴むことが出来ずに、単語として頭を通過していくような感じがします。

改めて金子さんの体験を読み返すと、命の尊さと対峙している瞬間が多く書かれていますね。

出兵前の母との会話、刺突訓練の農民のにらむ目、戦場やシベリアで鈍化してしまった生き死に対する感覚。そして日本に戻り、母との再会と母の死、娘の笑顔。

戦争体験を見聞きして、戦争について考えることは、人の命の扱われるべき姿を探すことでもあって、同時に自分の命についても考えるヒントがあるかもしれません。

数年前、いわゆる先進国で暮らす若者が中東の戦場に自ら進んで兵隊になりに行くということがありました。それも数万人近くいたようです。

若者それぞれににワケがあったと思いますが、僕はその若者たちの気持ちを部分的に、理解できるような気がします。

現在の生活の恵まれていようが、いまいが、その生活が長く続いていきそうなことに嫌気が差すこと。自分になんらかの使命を与えたいくなる衝動。そしてあらゆる社会問題の傍観者ではなく、主人公として生きたいという欲望。

そんな感情を持っていると、今の生活から脱却して主人公になれそうな、戦争が魅力的に映ることもあると思います。

若き頃の金子さんはこういった若者の気持ちと近い気持ちだったでしょうか。

もし近いとすれば、若者の持つエネルギーや衝動的な感情というのは、時代に超えても若者の心に芽生えて、そのエネルギーと感情は戦争と結びつきやすいのかもしれませんが。

しかし、今の若者には、数多く戦争体験者の証言があります。

僕も含めた若者が抱きがちな普遍的な感情は、衝動や欲望なのではないのか。と過去と照らし合わせ、同じ誤ちしないよう、見つめ直すことができます。

世界中の証言には、罪の無い子どもの死、罪意識から生涯解放されることのない苦しみ、罪意識から逃れるためにどんな思考を辿るのか、誰が、なぜ戦争を選んだのか。もう戦争を選択しないには十分な言葉が残されているはずです。

金子さんや戦争体験者から語られた言葉から、同じ誤ち犯さず、生きるのことの尊さを感じられるようになる日まで、多くの証言を触れて、一年や半年に一回では薄れてしまうので、戦争という過去と現在の生活と心境を見つめ続けなければいけない。改めてそう思いました。

② 金子安次さんへ

まず初めに、話してくれてありがとうございます。思い出したくない、知られたくない記憶、語り尽くせない経験や思いもたくさんあったと思います。どうやって人を殺したのか、殺せるようになったのか、目の前で自分の手によって殺された人の表情、その生々しい描写に、胸が苦しくなり、頭で想像してしまうその光景から目を背けたくくなりました。20代の全てを戦争に巻き込まれ、36歳でやっと帰国した後も差別にあり、結婚して子どもができて初めて自分の罪の重さに向き合い…、金子さんの人生にはずっと戦争があったのですね。私がこの短いお手紙を読んでいるだけでもこんなに苦しいのに、この辛い過去を思い出してそれを話すということがどれだけの苦しみを伴うものなのか、それを考えると、語ってくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

私は今27歳です。金子さんがシベリアで過酷な日々を過ごしていた年ですね。今、ドイツの大学院で、歴史をどう伝えるか、ということをお勉強しています。戦争の歴史が語られる時、よく「加害」、「犠牲」という言葉が使われます。私は、日本の「加害者」側の証言が知りたいという気持ちから、金子さんの手紙に興味をもち、読み始めました。でも読み終わる頃には、金子さんを「加害者」とは呼べない、呼んではいけないという気持ちになりました。もちろん、殺された方のご遺族にとって「加害者」であることは間違いありません。でも、よく考えなければならぬと思ったのは、戦争は人を殺すという犯罪を正義にしてしまうということです。国家が、10代20代の若者を、国のためだと信じ込ませ、暴力で心を支配し、人を殺せる道具にしてしまうことは、金子さんの実体験がリアルに物語っています。そう考えると、金子さんも、戦争を引き起こした国家の「犠牲者」だといえるのではないのでしょうか。「戦争で、私の家族が殺されました。」という苦しみも、「戦争で、私は人を殺しました。」という苦しみも、どちらも戦争によって生まれた「犠牲」であり、この無数の「犠牲」を生み出す構造こそが戦争の怖さだと思いました。

昨年末、私の祖父が90歳で亡くなりました。長崎県出身の祖父は、1945年6月の佐世保大空襲によって両親を亡くし、出征していたお兄さんはフィリピン沖で戦死、長崎市や広島市に住んでいた親戚は原爆で亡くなりました。戦争によってほとんどの家族を亡くし、終戦後15歳でたった一人になったのです。そんな祖父の過去について幼い頃から聞く機会があったので、私にとって戦争とは、遠い昔の歴史という感覚ではありませんでした。でも、祖父の死を通して、私はこうやって戦争体験者から直接話を聞ける最後の世代なのだとこのことを実感しました。もう望んでも声を聞くことはできません。もっと話を聞いておけばよかったととても後悔しています。金子さんにも、できることなら直接お会いしてお話したかったです。こうやって記憶を語れる人がついにいなくなってしまうとき、この世界がどうなるのか、正直私は今とても不安です。しかしそれと同時に、伝えて遺してくれた

この記憶と想いを忘れてはいけない、繋げていかななくてはいけない、それが私たちの世代に託されていることのような気がするのです。

瀧元深祈（1992 年生まれ、27 歳、大学院生）

③ 金子安次さんへ

「金平糖はいらねえ。生きて帰って来い。」という母親の言葉に対し、金子さんはがっかりしたことを知り、当時の日本では兵として偉くなるのが良いという思考が染みついていたことが想像できました。このような思考が一般的になるほど、戦争という非常事態に染まった日本を想像すると恐ろしいです。

このような当時の日本の様子にも驚きましたが、戦争での兵の扱いの酷さにも驚きました。様々な理由で毎日のように殴られる新年兵。戦場で戦って生き抜くためにこのような指導が必要であった、という意見が上官から聞こえてきそうです。その上官も最初は新年兵として殴られていたのでしょうか。そう考えると、日本人の間でも負の連鎖が起こっていたことに恐怖を感じました。このような日本人による日本人に対する行為からも戦争がとても残酷な行いであったことが伝わります。

また、新年兵が集められて行われた刺突訓練。これは人を人でなくさせる行為であったと思います。お互いに襲いかかり合うでもなく、とらえられた中国人を一方向的に縛り付け、訓練と称し殺させる。殺される人は命を失い、殺す人は殺した罪と共に殺しができるような精神状態へと強制され、互いに人として生きることが不可能または困難になります。このような残虐な訓練の内容を具体的に知り、改めて戦争の悲惨さを感じました。また、国同士の戦いに罪の無い国民が巻き込まれ、命を奪い奪われることを、とても恐ろしく感じます。

もしも私に徴兵の紙が届いたとしても、手足を折ってでも行きたくないと思ってしまいます。お国のためだと言われても、このような殺し合いが国のためだとは思えません。また、二度とこのような行為を国のためだと考える状況に陥ってはならないと強く思いました。

2003年、16歳、東京純心女子高等学校1年

④ 金子安次さんへ

戦後 70 年以上たった今、金子さんは現在を平和な世の中だと思いますか。私はこの問いについて、初めは平和だと思いました。しかし、再び深く考えてみると、世界に目を向けてみれば、まだ戦争は絶えません。果たして、これは平和な世の中だと言えるのでしょうか。

私は、金子さんの証言を読んで、自分のことしか考えない、そんな考えがあるために平和から遠ざかっていくのだと恥ずかしながら思いました。殺せと言われれば殺し、死ぬといわれれば死ぬ、何の権利もない戦犯。心を持った人間が人間ではなくなる状況に私はとてもショックを受けました。しかし、証言を読み終えて、私は金子さんたちが心を取り戻したきっかけがあったことに気が付きました。それは人から大事にされることです。中国の戦犯管理所での美味しいご飯や看病など彼らの寛大さがあったからこそ、自分が唯一無二の存在であることに気付けたのだと思います。

戦犯たちの起訴免除が決まった際の中国職員の涙。かつては敵だった国の人のために泣くことは簡単ではありません。しかし彼らの涙は、自国民を殺された恨みではなく、戦犯の解放、自由をともに喜ぶ美しい涙だったのでしょう。人を大切にすること、その心が戦争をなくすために求められるのではないのでしょうか。

ここで、証言を読み終えた今、私は最初の問いについて、残念ながら平和ではないと答えます。目を背けてはいけないことがまだまだあります。けれど、私一人で解決できることはありません。まずは自分のできること、人を大事にすることを忘れずに生活していきたいと思えます。自分の幸せより相手の幸せを望む人が増え、一日でも早くみんなが幸せな日々を送ることができるようになります。

最後になりましたが、勇気ある証言をありがとうございました。

2003 年、16 歳、東京純心女子高等学校 1 年

⑤ 金子安次さんへ

「兵隊は人間であって人間じゃないんだよ。」

金子さんの証言を読む度、苦しい日々を何年も送られてきたことを痛切に感じます。そして、私は、金子さんの言うように、兵隊は日本政府の消耗品だと思います。使いたい時に使い、いらなくなったら（見）捨てる。本当に、「兵隊は人間であって人間じゃない。」

私は今回、日中戦争とシベリア抑留について調べ学習をしました。すると、知らなかったこと、衝撃的な事実が多かったことに気付きました。人殺しの訓練、毒ガスの使用、人体解剖等、どれも強く印象に残っています。初めは、日本がやったこと、戦争中に行われたことが信じられなかったです。そこで、自分の国のためとなると、人はこのような残酷な手を使ってまで人を殺してしまうのだと感じました。

戦争は、自分の国の意志を主張し、他の国の意志を受け入れないために起こるものです。だから、「銃を持たんでも戦争を防ぐことはできる」と金子さんが言うように、まずは他国の意見を聞き、考えることが必要だと考えます。国民である私たちにも同じことが言えると思います。

また、私は国際交流をすることで、戦争を防げると思います。私は今年の夏、オーストラリアに行き、たくさんの人と出会い、仲良くなりました。だから、もし日本とオーストラリアが戦争になるとしたら、戦争をしたくありません。このように、世界の人とつながることで、戦争を防げると思うのです。

私は、金子さんのように、戦争によって苦しい思いをする人がいない世界にしたいです。そのために、多くの人に、金子さんや他の体験者の証言を語り継いでいきたいです。そして、私も含め、多くの人が証言をもとに考え、話し合える日が来ることを望みます。

2003年、16歳、東京純心女子高等学校1年

⑥

金子安次さん、こんにちは。私はあなたの戦争の時代で体験したことを読みました。今の時代では考えられないことばかりで正直怖かったです。でも、その時代では仕方がなかったことなのかなと思います。

一年もすると人を殺すことに対する恐怖心がなくなることや井戸の中に落とされた母親を追って、子どもが自ら井戸に飛び込んだことが特に印象に残りました。人を殺すことは怖いはずなのに、洗脳されたように人を殺すことや人が死ぬことに何も感じなくなってしまう戦争はとても酷いし怖いなと思いました。上官の命令に逆らうと殴られる、殺されると考えたら逆らうことができない気持ちはとても分かります。でも自分が傷つくのが怖いからと言って、多くの罪がない人々が殺されていくと思ったら、自分が傷ついても良いのかなって気持ちが少しあります。そんなことも思わせる戦争が私は本当に憎く思います。

中国が寛大政策で日本人を解放してくれたように、私たちも寛大な心を持てば私たちの周りにある問題を解決する一歩となるかもしれないと思いました。寛大な心を持たず、自己中心的な考えばかりを相手に押しつけると事態は悪化すると思います。私の今までの経験を思い返してみると、自分の考えていることだけを押しつけて喧嘩が悪化してしまったことがあります。あの時、自分が大人になっていればすぐに解決したのにと考えたので、これからは寛大な心を持ち続けようと思われました。

世界が平和になるためには、一人ひとりが相手の気持ちを考えて行動することや相手の意見を聞くことが大切だと思うので、私もこれから気をつけていきたいと思います。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑦

初めまして。今は2020年です。私は、金子安次さんの体験談を聞いてとても複雑でした。初年兵の時に、人を殺す訓練を受け、一般人の殺戮にも手を染めてしまったとき、どんな気持ちでしたか。私がもし同じ立場だったら、泣いて逃げ出してしまうかもしれません。でも、この時代は逃げるができなかったのが事実だったんですよね。お母さんが生きて帰って来いって言っていた言葉がとても心に残りました。言われたときは期待していないのかなとか考えたりしたけれど、今となってみると感動しますよね。

林の中で中国人を殺せと言われたときは、とても怖かったですよね。普通の神経じゃ殺せない。こんなことを日本がしていたと考えただけでとても恐ろしいです。一年間人を殺し続けて、平気で自分から行えるようになったときは、どんな気分でしたか。帰りたいと思いませんでしたか。日本に帰れる日が決まったときは、本当に嬉しかったと思います。裁判にかけられたとき、残酷さに押しつぶされそうだと私は思います。

「兵隊はやれって言われれば殺しでも何でもやんなくちゃなんない。死ねって言われたら死ななくちゃならない。何の権利も無いの。消耗品だよ。兵隊は人間であって人間じゃ無いんだよ。」

この言葉にとっても胸を打たれました。中国人が日本人を赦し処刑されずに済んだから、今私たちは戦争無しで生きているのかもしれないと思いました。

「みんなを不幸にする軍隊なんかいない、戦争はしちやいかんと言いつける。銃を持たんでも戦争を防ぐことができる。」

この言葉を私も忘れずに生活の中でできることをやっていきたいと思います。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑧

私は今まで日本の戦争と言えばアメリカとの戦争で原子爆弾を落とされ負けたという印象が強く、日本が行ったことをあまり知りませんでした。しかし、金子さんの証言を読んで、日本が行ってきたことの恐ろしさが分かりました。

まず一つ目は刺突訓練です。

何の罪も無い中国人の農民を木に縛って人を殺す訓練をしていたのは、本当に許せないと思いましたが、もし自分が金子さんの立場だったら殺していたかもしれないなと思い、そんなことをさせていた日本がとても怖くて仕方ないなと思いました。

二つ目は部落で親子をつかまえて殺したことです。

これもまた罪の無い中国人を殺していて、子どもが井戸にぶち込まれたお母さんのことを見たときの気持ちは想像がつかないくらい辛いだろうと思ひ涙がたくさん出ました。子どもにとって親という存在は、自分の世界だと思ひ、この子は自ら井戸に入っていったことから、お母さんからとても大きな愛情を注がれていたんじゃないかなと思ひ井戸に入れるように指示した人はとんでもない人だと本当に憎く思ひました。

日本は天皇の命令は絶対という国で、そんな指示をする人がどんどんやり過ぎてしまっていると思ひ、金子さんが心から反省したのは自分が父になってからとっているので、洗脳されているように思ひました。戦争は人と人との殺し合ひで、一人ひとり愛する人や愛してくれる人がお互いにいると思ひるので、一人を殺したときその人の命を奪っただけで無く、殺された人の周りにいる人の心も奪っていると思ひました。もし私の大好きな人たちが罪も無く殺されたら、多分生きてはいけないので二度と戦争が起こらないことを願ひます。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑨

私は、金子安次さんの手記を読みました。読んだ後、涙がぼろぼろ溢れました。泣かずにはいられませんでした。胸にそっと手を当てて、この手記を書いた金子さんがどんな気持ちだったのかを考えました。たちまち、胸は悲しみと苦しみで一杯になりました。人を殺さなければ生きていけない醜い世界。戦争中に儂く亡くなってしまう人たち。人を殺すことに慣れてしまう自分……。悪夢のような毎日。逆らい、自分の意志を伝えることすら叶いません。そんなことをしたら自分の命が危うくなってしまいます。そんな状況を思い浮かべ、私は最終的にこんなことを思いました。どうすることもできないんだ、自分が命を落とさないためにはそうするしか無いんだ、と。半ば諦めるように。

「人を殺したくないので私が死にます」なんて言えません。どんなに惨めで最悪でも生きていないとどうすることもできませんから。それに、金子さんには大切な家族がいます。お母さんです。私は、金子さんの手記の中で特に心を揺り動かされたところがあります。

「戦場では私もたくさんの兵士が死ぬのを見たがみんな『おっかあ』『おかあちゃん』と小さい声で二こと三こと言って死んでいったよ」

「母親ってのは大きな存在だよ」

「おふくろの顔はどこでもはっきり覚えているからね」

金子さんが死にゆく母を思う場面です。お母さんっていつの時代も暖かくって優しい素敵なものなんだなと思いました。お母さんのことを考えると幸せな気持ちになれます。金子さんの非情な体験の合間に見えた幸福な場面でした。一番泣きました。

金子さんが一番思い出したくないであろう戦争の苦々しい記憶を引っ張り出して、戦争はしちゃいかんと言っている意味をしっかりと考えないといけません。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑩

まずこのような手記を残していただきありがとうございます。今回、金子さんの手記を読んで、戦時中の日本の兵隊の裏側お初めて知りました。人殺しの訓練や部落の攻撃など、たった七十五年前にあったとは信じがたいできごとばかりでした。しかし、私はこのような過去の戦争のことを昔話のように感じて目を背けるのではなく、一人ひとりがその歴史を知ろうとすることが平和にとって大切だと考えています。ですから今回、金子さんの手記を読むことができ非常に感謝しています。

金子さんの手記で私が一番心に残った言葉は、「兵隊は人間であって人間で無い」という一言です。戦争で敵同士が争い合うことはもちろんですが、兵隊が人間として扱われなかったことはあってはならないことだと思いました。金子さんはこのような軍隊で生活し、自身も酷い暴力等を受けてきたことから軍隊も戦争もいけないと強く訴えていて、それは力強く私の心に響きました。

私は、人は争い続けていても何も解決しないのだと金子さんは伝えたいのではないかと思います。金子さんは、結婚して子どもができたときに今まで自分がしていたことの悲惨さを初めて感じていました。それは当時の中国人と同じ立場に立ったからだと思いました。ですから、常に相手と同じ立場に立って何をされたり言われたりしたら嫌なのかということを考える事が大事だと思います。小さなことかもしれませんが、それが大きくなっていくことで同じ過ちを繰り返すことがなくなると思います。

今回、金子さんの手記を読んで、戦争はしてはいけないという思いが強くなりました。非常に苦しい過去かもしれませんがこの手記を残していただいたことに感謝して思いを未来へつないでいきたいと思います。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑪

私は金子安次さんの証言を読んで、戦争の恐ろしさを改めて実感しました。印象に残ったことは、戦犯管理所で面倒を見てくれた中国人の金源先生が言った「中国はもう日本と戦争をするのはこりごりなんです。死にたくないんです。そのためにあなた方を解放するんです。もしあなた方を処刑したら、日本の人たちは腹を立ててまた我々と戦争したくなるでしょう。戦争はもう止めましょう。日本に帰ったら平和で豊かな生活をしてください。」という言葉です。

私はこの言葉を読んで本当にそうだなと思いました。人は自分から喜んで殺されたいとは思わないはずで、戦争で殺し合っとうれしい当気持ちにはならないと思います。金子さんは「みんなを不幸にする軍隊なんかいない、戦争はしちゃいかん」と言っていました。みんなが不幸になる戦争をしても何の得にもならないし、悲しむ人が増えるだけだと思います。

戦争中に金子さんたちが命令されてさせられていた中国人の農民を捕まえて木に縛り付けて人を殺す度胸をつけさせる訓練や、井戸に人を落として手榴弾を投げ込んで殺すなど、今となってはあり得ない行為が戦争中には当たり前に行われていたと考えると恐ろしすぎると感じました。平和な生活が一番だなと思いました。そして、殺せと命令していた偉い人たちは、兵隊の人を人間じゃないように扱って人権を無視して消耗品のようにして本当にひどいなと思いました。

私は金子さんの証言で人の命を雑に扱う戦争なんて絶対にしてはいけない物だと改めて実感できました。今の日本で私たちは平和に暮らせているので、今の平和な日本を保てるように私たちができることを小さくても頑張っていこうと思いました。そして、相手のことを思いやる心を持って人に優しくしようと思います。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）

⑫

私は金子安次さんのお話をお読みしました。長崎で生まれ育った私は、小学校の頃からたくさんの被爆者のお話を聞いてきましたが、金子さんのお話を読むと、まだまだ戦争のことについて知らないことがあるんだなと思い知らされました。そして、この話を読みながら、怖いなど感じたところがいくつもありました。

まず、刺突訓練という人殺しの訓練です。この話を初めて聞いたとき、本当にもうびっくりしました。今の時代、暴言・暴力や色々なハラスメントが問題になっている中、自分には考えられなかったです。そのため、すごく印象に残りました。人の命の大切さを深く考えさせられました。もし、自分がその時、その場所にいたらどうしていただろうかと私は考えてみました。正直なところ、金子さんと同じようにしていたかも知れません。そうしないと自分が殺されるから。でも、私には分からないことがあります。なぜ、戦争に行くときに喜ぶ人や万歳ができるのかなと疑問に思いました。

日本の敗戦でシベリアでの生活もとても今の私たちには想像できない者なんだなと文章から伝わってきました。上官の命令は天皇の命令で、背いたら死刑。背くことが許されない状況で自分だったらもう耐えられません。私は、中国の寛大政策がすごいなと思いました。日本にひどいことをされても、起訴免除としたことです。その理由は、もう日本と戦争するのは嫌。すごく勇気があることだろうなと思いました。

最後に私が思ったことは、戦争は決してしてはならないし、戦争をしたところで誰も幸せにはならない。そして、戦争につながるような暴力や発言も決してしてはいけないと思いました。自分の周りの人が少しでも幸せと感じられるように日々を送っていきたいです。

2003年生まれ、16歳、純心女子高等学校1年（長崎）